

安田 秀次郎（やすた・ひでじろう）

1、プロフィール

第一期「明星」の同人であった。明治末から大正の初期にかけて県文壇で活躍をした歌人だが、中央文壇人來県にも力をつくした。

<生没>

1878(明治 11)年1月3日 ~ 1925(大正 15)年7月 12 日

<青森との関わり>

北郡板屋野木村(現板柳町)生まれ。東京専門学校卒業後、家業に従事。

2、作家解説

本名は秀次郎といい、蛇莓や莓庵の号も用いた歌人。明治 11 年に父次三郎と母きよの三男として現在の板柳町に生まれた。東奥義塾を経て今の早稲田大学を卒業して帰郷し、りんご栽培に熱心だった長兄元吉の経営に参画しながら文学に親しんだ。

その後は俳句や詩、短歌を作っては新聞や雑誌に投稿した。最初は大和田建樹に傾倒し、仲間らと図って明治 36 年に板柳に招いて講演会を開いている。その後も徳富蘆花や安倍能成、尾崎行雄、与謝野寛夫妻など中央文壇人の來板に力をつくした。

秀次郎は最初、佐々木信綱の「心の花」に出詠し、先輩で板柳小学校訓導工藤大成らと名古屋の栗田広治の源語会板柳支部を作り、東奥日報に詩や短歌を発表した。特に明治 38 年から 41 年頃にかけては精力的に発表している。また、41 年頃から新詩社の「明星」に加わり、11 月の同誌終刊号では同人扱いで肖像写真と短歌8首が掲載された。しかし、温順な歌風そのままの性格のためか、「スバル」や第二期「明星」に短歌がわずかに見られる程度で、その後には大きな活躍はなかった。

大正15年、47歳という若さで病死をしたが、与謝野寛は第二期「明星」(9の2)で清廉にして独歩、純情素朴な人柄としてその死を悼んだ。